

山鹿灯籠まつり

熊本県最大級の夏のイベントの 1 つが山鹿で開催され、毎年 10 万人を超える人が訪れる。紀元後 1 世紀から 2 世紀にこの国を支配していたと言われている景行天皇を記念して、8 月 15 日と 16 日に、山鹿灯籠まつりが開催される。言い伝えによると、景行天皇の一行が菊池川沿いを進んでいるときに困っていると、景行天皇を助けようと山鹿の村民が松明を掲げた。灯籠まつりは、この出来事に敬意を表したものであり、「灯籠」または伝統的な紙製提灯のモチーフをわくわくするように効果的に使っている。

芸術、神事としての「灯籠」

山鹿「灯籠」には、伝統的な形をした紙製提灯だけでなく、城郭、神社、人形の形をしたものなど、より精巧な建造物や、その他展示もある。この提灯は軽量で、中が空洞になっており、和紙（伝統的な手漉き紙）のみで作られている。木や金具は使用されていない。これらの提灯を制作する特別な修練を積んだ職人は、毎年 4 月に大宮神社で行われる神事でお祓いを受ける。それから、山鹿灯籠まつりの頂点である「上がり燈籠」で大宮神社に奉納する大きな「灯籠」の制作に取り掛かる。

1 年を通して感じられる祭事

8 月 15 日、山鹿灯籠まつりの初日の夜に、新しく制作された「灯籠」が持ち出され、山鹿の町中で展示される。大宮神社境内で山鹿灯籠踊り保存会による踊りが披露され、これに続き、その他のおまつり会場でも踊りが繰り広げられる。初日の夜は、菊池川での花火で最高潮に達する。

8 月 16 日、菊池川の河畔で執り行われる儀式により、古代に景行天皇が訪問されたことが思い出される。松明の行列が町中を練り歩き、地元の小学校に向かう。松明が到着すると、金提灯や銀提灯を頭にのせたおよそ 1,000 人の女性たちが同時に踊る「千人灯籠踊り」が始まる。女性たちが太鼓を打つ音に合わせて踊り、歌う。

踊りが終わると、「上がり燈籠」の一環として、地元の職人らが製作した大きな「灯籠」が大村神社に運ばれる。その後、これらの「灯籠」は、翌年の山鹿灯籠まつりまで大宮神社で通年展示される。山鹿「灯籠」は、その文化的重要性が 2013 年に認められ、経済産業省により、日本の伝統的工芸品に正式に指定された。

山鹿灯籠まつりは 2 日のみの開催となっているが、山鹿を訪れれば、1 年を通じて、大宮神社や山鹿灯籠民芸館やその他の会場で、「灯籠」づくりを見学し、祭事の産物と出会うことができる。